

15週以降に強制入院と同程度の増加がみられた。最後に、人格障害なし/任意入院群、人格障害なし/強制入院群、人格障害あり/任意入院群、人格障害あり/強制入院群の4群を設定してBMI増加率の推移を比較した。その結果人格障害なしの群では6週時点で人格障害ありの群に比較して明らかな増加がみられた。人格障害なし/強制入院群では15週までにさらに著明な増加がみられた。これに対し任意入院群では6週以降、人格障害の有無に関係なく緩徐だが着実な増加がみられた。BMI増加の最も遅れるのは人格障害あり/強制入院群であったが、この群の増加率をみても15週以降に他の群に追いつく期間が認められた。以上の結果から人格障害の有無と入院形態はBMI増加率の推移に対して独立に、異なる時点で影響する因子であると考えられた。入院治療で最大の成果を挙げるには、治療意欲、病型、人格障害の合併などの要因を考慮した個別的な治療計画を考える必要がある。

4 視覚誘発電位における導出部位別波形の研究 —痴呆性疾患における検討—

坂井 乃美・吉浜 淳・佐々木清志
結城 麻奈・直井 孝二・山田 治
松田ひろし・飯森眞喜雄*

立川メディカルセンター柏崎厚生病院
精神科
東京医科大学精神医学教室*

【はじめに】

健常成人、健常老人、血管性痴呆（以下VD）、アルツハイマー型痴呆（以下DAT）において、通常は視覚誘発電位の頂点潜時は後頭葉のみで測定されるものを前頭部、中心部、後頭部各導出部位においても測定し、加齢変化及びVDとDATの差異について検討をした。

【対象と方法】

対象は予め検査について同意を得た健常ボランティアと当院受診中の患者計70名で内訳は健常成人16名、健常老人17名、VDと診断された27名、DATと診断された20名である。

検査方法は、視覚刺激に赤色LED（Light emitted diode）ゴーグルを使用した閃光刺激を用い、各導出部位について頂点潜時を測定し、前頭部と中心部においては、N130とP190を同定し、後頭部についてはP3（P100）を同定した。有意差についてはウェルチのt検定を行った。

【結果】

1) 前頭部・中心部のN130・P190：健常成人に比し健常老人では有意な延長がみられた。しかし健常老人に比しVDでは有意差なし、DATでは短縮が認められた。

2) 後頭部のP3（P100）：健常成人に比し健常老人、VD、DATで有意な延長が認められた。VDとDATとの差は認められなかった。

【考察】

前頭部・中心部のN130・P190、後頭部のP3（P100）全てで、健常成人に比し健常老人で有意な延長がみられた。これは加齢変化によると考えられ、従来の研究でも後頭部のP3（P100）で指摘されていたが、前頭部・中心部のN130・P190でも同様の結果が得られた。

VDとDATの変化については、後頭部のP3（P100）の変化は従来の研究結果と一致した。これはVDでは血管支配領域に一致して皮質構築が破壊され、神経回路の遮断などの影響とされ、DATではアセチルコリンの低下に伴い頂点潜時が延長するとされている。

一方前頭部・中心部のN130・P190の変化については、従来は、精神遅滞児において、N130とP190の延長が指摘され、正常児でも発育上髄鞘形成が他の部位より前頭野で遅い為、成熟完了の時期に伴い頂点潜時が短縮するとされている。今回の結果では健常老人とVD、DATとの比較では、後頭部のP3（P100）のように延長はみられず、反対に短縮する傾向が認められた。視覚誘発電位の起源は後頭葉の視覚中枢であり、従来、頭皮上の経時的変化では後頭部に陽性焦点が出現しその後前方に移動し頭頂部で最大になるとされ、DATではこの陽性焦点の移動の局在化・渋滞化が指摘されている。今回の結果も、DATでは前頭葉、側頭葉の皮質神経細胞の脱落によりその詳細な機序

は不明だが、導出された遠位の電位は健常例と比較して頂点潜時の短縮と表現されると考えた。

5 逆説性うつ病を呈した臓器移植ドナーの2例

諸橋 優子・高橋 邦明・細木 俊宏

小林 真理・染矢 俊幸*

新潟大学医学部附属病院精神科

新潟大学大学院医歯学総合研究科

精神医学分野*

【はじめに】腎移植において移植が順調に行っているにもかかわらず術後にレシピエントが抑うつ状態を呈する病態を春木は逆説性うつ病と名づけたが、福西らによりレシピエントばかりでなく腎移植ドナーにも起こりうる事が報告されている。新潟大学では生体腎移植および生体肝移植に際し精神科医がレシピエント(R)及びドナー(D)の全例に対し移植前後の精神的現在症を評価しケアに関わっているが、「逆説性うつ病」と思われる肝移植Dの1例、および腎移植Dの1例を経験したので報告する。

〔症例1〕54歳女性。肝硬変の弟への生体肝移植Dを自ら希望した。術前面接では不安や抑うつ症状はなく移植に対して意欲的であった。術前心理検査では、自己の意識している心理状態を表す自己記入式心理検査では術前の不安は少なく、ストレス状況に対してバランスの取れた対処をするという結果であった。しかし比較的深い心理を投影する統合型HTPからは貧困な心的状態と自分の身体に対する著しい不安と抑圧が推察された。術後経過は、R、Dともに身体的には順調だったが、術後7日目よりDに抑うつ症状が出現した。特定不能のうつ病性障害の診断でリルマザホン1mgを投与し支持的に接した。「これで私の役割は果たした。でも予想以上に術後が辛かった。」と述べ、抑うつ症状の発現には荷おろし状況と予期した以上の身体的苦痛の関与が考えられた。

〔症例2〕48歳外国籍の女性。日本人の夫への生体腎移植Dを自ら希望した。術前面接では極軽度の不安が認められただけであった。術後経過では、R、Dともに身体的には順調だったが、手

術2日後よりDに頭痛、不安、抑うつ気分が出現した。「腎提供により家族の一員として認めてもらいたかったのに。」と述べ、術後に家族関係の改善を期待したが裏切られた思いを強く訴えた。家族内葛藤が抑うつ症状の発現に関与していると思われた。特定不能のうつ病性障害の診断でアミトリプチリン20mgを投与し徐々に症状は軽快した。

【考察】これらDの2例は逆説性うつ病と考えられる。抑うつ症状の発現には荷おろし状況、身体的苦痛、家族的背景との関連が推察された。RばかりでなくDにも起こりうる事、腎移植ばかりでなく肝移植でも起こりうる事が示された。

6 抜毛と強迫症状を呈したアスペルガー障害の一例

鈴木由紀子・増沢 菜生*

新潟大学保健管理センター

新潟大学教育人間科学部障害児教育科*

アスペルガー障害は古くから提唱されている概念であるが、脚光を浴びるようになったのはごく最近のことである。アスペルガー障害には他者と関わりたい気持ちがあるものの相手の感情や状況を配慮できず一方的な関係しか築けないために孤立しやすく、また強いこだわりのために集団生活のペースにのれないといった特徴がある。このような対人関係・社会性の障害を抱える患者たちが不安・抑うつ、被害関係念慮、暴力、不登校などのさまざまな不適応症状を呈して精神科外来を受診する場合が最近増えている。しかしアスペルガー障害に対する治療法は今のところ確立されていない。時間の限られた一般外来の中で彼らに援助できることをある症例を通して考えてみた。

症例は抜毛や手洗い強迫を主訴として初診した中学1年の女子、A子である。A子は言葉や発達の遅れを指摘されたことはなかったが、幼少期から友人と遊べず、こだわりの強い面があった。小学6年頃より抜毛や手洗いが頻回となり、こだわりのために学校や家族のペースについていけなく